海外の若者が考える東京の都市の魅力

太田（おおた）　佳代子（かよこ）
建築キュレーター／NPO 法人建築思考プラットフォーム 理事

1　新しい状況

世界的な建築大国、日本――私にはこのフレーズの根拠が分からず、最初聞いた時には「本当か？」と思ったものだ。だが、最近はまんざら誇張でもないことを示す現象が次々と起こっていて、違和感はなくなった。

例えば、建築界最高の栄誉といわれるプリツカー賞。2024年の山本理顕氏の受賞により、日本が欧米の国々を抜いて世界最多の受賞国となった。明らかに欧米中心の賞だった20世紀には、この展開は予想できなかった。数で見ると、1980年代の日本人受賞者は丹下健三氏ひとりだったのが、2010年代は一気に３人と１組である。確かに「建築大国」を裏打ちする事実の一つと見ていいだろう。

世界的建築家の数だけではない。日本で実際に建築を見た人が異口同音に発するのが、施工技術への賞賛である。独創的な建築の革新性や実験性は、実際に見てみると、１mm の狂いも感じさせない精巧な仕上げや高度な建設技術があるからこそ成立したのだと分かる。日本の施工会社が持つ技術力や組織力に支えられた、建築水準の高さなのである。

一方、海外の若い建築士や学生たちが就職口やインターンの席を求めて日本の設計事務所の門を叩くようになったことも、日本建築の国際的人気度を示している。二、三十年前までは、欧米の設計事務所で武者修行して帰るのが日本でのステータスだったのが、今や逆転している。人手不足の昨今、日本のアトリエ系設計事務所に限っては修行を望む海外の若者たちに助けられているようだ。

さらに、海外の大学や大学院の先生たちがこぞって学生たちを率いて来日し、スタディツアーをするようになったことも最近の顕著な動きである。コロナ前には既に年間20以上の学校が日本に学生を送り込んできていた。コロナ禍で一旦下火になったものの、今また北米やヨーロッパ、韓国や東南アジアのデザインスクール(大学院)のツアーが日本に集中している。国際的な有名校もたくさん混じっている。これは20世紀には考えられなかった現象である。

2　なぜ日本にやって来るのか

海外の学生たちがスタディツアーで日本にやってくる目的、それは二本立てである。片方はもちろん、日本の文化に直に触れ、建築を自分の目で見、身体で経験することだ。伝統建築から実験的な現代の話題作まで、日本には見るべきものが豊富かつ多様にある。西洋と同じ近代建築の伝統や思想の上に立ちながら、全く異なる社会的・文化的文脈の中で生まれた日本の傑作を訪ね歩くことは、建築や都市デザインを学ぶ者にとっては今や常識のルーティーンになった感がある。

もう片方の目的は、日本建築への憧れとは一見、裏腹に見える。この国が抱える社会的な課題に着目し、自分たちの専攻する建築や都市デザインやランドスケープデザインといった職能が、どんな方法をもって問題の緩和や解決をもたらし得るのかを考える、といった実地学習をするためである。ピンポイントで建築作品を見る一方で、視線を社会全体に広げ、そこにある課題と可能性を考えよ

うというのである。

日本は建築大国でありつつ、成長期を終えた高度資本主義社会としての課題を持つ国である。即ち人口減少、少子高齢化、経済の衰退、あるいは資本の集中と偏りといった課題を抱えている。特に人口の問題は、他の先進国に先んじて日本が直面していると見ることもできる。そこでの社会状況を知り、建築的思考を鍛えることは、国際的な視点を持つデザイナーとして貴重な経験になると捉えているのだろう。

というわけで、2012年から日本に学生たちを送り出し始めたハーバード大学デザイン大学院(GSD)のプログラムに、私も講師やプログラム企画者として10年間携わってきた。このデザインスクールは日本研究に熱心で、日本に学生を送り込む世界的トレンドの先駆けとなった。コロナ禍になるまでは、学生たちが4ヵ月にわたるまるまる1学期を東京で過ごし、設計スタジオとゼミを履修していた。「東京スタジオ」と呼ばれるこのプログラムは人気で、毎年抽選で選ばれた12人の学生が、伊東豊雄氏や藤本壮介氏の指導のもと、テーマに沿ってリサーチし、入念な設計構想を作成していた。

数ヵ月間、東京の街や人を観察し、歴史や社会の状況を学び、都市の未来を考えるという課題をこなしたハーバードGSDの学生たちは、実際どんなものに目を止め、何に魅力を感じ、どんな未来を想像したのだろうか。

3　再開発でも保守でもない未来

都市や建築のデザインを学ぶ人間が、異国である日本の都市を観察すると、興味深い洞察が上がってくる。地元に暮らす人間の目には見えているのに認識されないもの、当たり前すぎて疑問を持たないことがたくさんある。いわば、そうした死角が彼らの視線で明るみに出されることで、私たちも普段見逃しているものが見えてくる。

学生たちが総じて興味を抱く場所。それは、東京でいえば、大規模な再開発によってどんどん変化していく都心の外で、昔ながらの街の姿を何とか維持しようとしつつ、時代の趨勢とのジレンマに挟まれた古い界隈である。その典型が神楽坂や「谷根千」と呼ばれるエリアで、人々が支え合って生きてきた地域社会(ネイバーフッド)の面影を残す街並みに、学生たちは関心と愛着を抱く。神楽坂は小さな建物が密集し、驚くほど狭い路地や行き止まりがあったりもして、彼らの目には街全体が迷宮のように映るらしい。西欧の街並みのようにはコントロールされておらず雑然としているが、その分、商店主や住民が自由に使いこなせる余地があり、街は小さな工夫やメッセージで溢れている。だから、歩いているだけで独特の活気を感じることができるのだ。

「谷根千」と呼ばれる谷中・根津・千駄木の一帯では、住民の高齢化と観光ブームの圧力が相まって、伝統的な街並みとして最後の砦を維持しているかに見えるこのエリアも、住民や店主の構成が少しずつ変化しているという。とはいえ、商店街から一歩奥に入れば、路地に面した小さな古い家が空き家状態から救出され、スモールビジネスの装置として復活するといったケースもちらほら見られ、街の新陳代謝が始まっていることを実感できる。何とか再開発計画に飲み込まれず、街が自力で活性化していく流れが生まれた背景には、建築家・宮崎晃吉氏ら、個人レベルのイニシアチブがあった。デザインの力を動員して地域住民の自主性を高めていく様子は、ジェーン・ジェイコブスの思想をも思い起こさせ、学生たちの心を捉えるのだと思う。再開発でもなく現状の保守でもない「オルタナティブな開発手法」は、世界中の都市が模索しているものであり、そのモデルを彼らはこの「谷根千」に見ているのかもしれない。

4　地域全体での再生戦略

東京スタジオでは、馬喰町・横山町の活性化をテーマにしたこともあった。ここは江戸時代から続く衣料問屋街で、昭和時代までは活気があったのだが、産業構造の変化によって街の性格が変わりつつある。小さな商業建築がまとめられてホテルチェーンやマンションに変わり始め、日中も静かだ。だが、中には古い建物の一部がスモールビジネスの店舗やギャラリーとして再利用されているところもあり、新しいエネルギーの微かな兆しとなっている。

このエリアは大手不動産会社が大規模再開発を進める日本橋に隣接しながら、幸か不幸かその勢いが及んでいない。しかし、ズームアウトして見ると、神田川や隅田川が徒歩圏内であり、浅草や秋葉原といった個性的な街に近い。都心のど真ん中に残るこの飛び地のようなエリアは、従来の開発パターンではなく、慎重かつ大胆な方法で未来につないでいくべきではないか。

マンションやホテルチェーンに場所を明け渡すのではなく、今ある中小規模の建物を新しい「つながりの場所」として再生する。単体の建物やユニットごとに考えるのではなく、暮らしの快適さ、楽しさにつながる場所や施設を、エリア全体として、戦略的に作っていくロードマップがあるといい。特に、若い家族や外国人の単身者、カップルなど、多様な人々が移り住んで暮らしたいと思うような環境を作る試みが、馬喰町・横山町のようなエリアでは効果的に行えるのではないか。スモールビジネスと建築家が協力し合い、子育てがしやすい、働く女性が住みやすい、街の中に気楽な交流の回路がある、外国人にも寛容であるといった状態が生まれるようなオルタナティブな開発ができれば、正に国際都市・東京の個性や魅力になるのではないか。そんな構想を学生たちは描いた。

5　日本由来の都市空間

日本には鉄道の発達とともに広がった駅前商店街という名の都市空間がある。英語の「shopping street」とは少しニュアンスが違うので、学生たちは「ショーテンガイ」と呼んでいる。そこでは店主と家族が上の階に暮らし、商売を営むだけでなく、地域を活性化し、人々に居場所を提供するという社会的な役割も果たしている。ところが店主の高齢化や後継者不足、相続などの問題により、この空間タイポロジーも存続の危機に晒されている。せっかくの魅力的な場所を、何とかデザインの力で活性化させる方法はないかと、自分のテーマに据える学生たちも毎年のようにいる。

商店街のほかにも、日本には地域社会を潤してきた空間が様々な形で存在してきた。両側町、路地、横丁、軒先、橋詰広場、古井戸、といった中間領域的な空間である。これらは地域社会の中の、あるいは外から来る人々との関係を促し、潤す社会的な空間だが、その非経済性、曖昧さゆえに、都市が更新されていく過程で消去されてきた。しかし、少子高齢化、労働人口の減少、空き家の増加などで住民同士の関係が希薄化するリスクが高まる今日、人々の交流をいかに促進するかが社会全体の課題として浮かび上がってきた。そしてそれが、建築や都市デザインの喫緊の課題ともなっている。

思えば1960年代の終わり、磯崎新氏を始めとする丹下健三氏の教え子たちが日本固有の都市空間を全国で見つけ出し、調査・記録したことがあった。欧米スタイルの都市計画が日本中で一気に実践され始めた時、日本固有の空間が消滅することへの危機意識を彼らは持ったのだった。『日本の都市空間』[1]という本になったこの記録は、人々のふるまいを誘導し、美意識に訴え、都市に物語性

1　都市デザイン研究体『日本の都市空間』（彰国社、1968）

を生み出し、集うという営みを支えてきた空間の、様々な形態を網羅している。だが、その多くは現実には失われつつある。

結局、学生たちは、東京という密度の高い都市空間の中に存在する隙間や余白、曖昧であるがために人々が自由に使いこなし、意味を与えることができた場所といったものに大きな魅力を感じるようだ。言い換えれば、人と空間との関わり合いが表出した場所である。そして、計画が統制されなかったゆえに生まれた不均衡やランダムさ、逆に、人々が積極的に関わった結果生まれた後付けの意味や機能といったものに、東京の魅力を最も感じているのではないだろうか。

6　都市空間のパワー・オブ・バランス

同時に、都心で進められている大規模再開発も、都市を変えていく重要なファクターとして見逃すことができない。ハーバード GSD では渋谷駅周辺のエリアをテーマに、この街の未来の有り様を考えたこともあった。学生たちは 4 ヵ月を東京で過ごす中、毎日のように渋谷を歩いては入念な観察とリサーチを行い、様々な提案を行った[2]。

渋谷の街は、私鉄系デパートに代表される大資本が作った空間と、人々が自然発生的に新しい文化や動きを作り出した路上や公園や小さな店舗といった、インフォーマルな空間でできていると彼らは分析する。いわば計画された空間と、見出された空間であり、この両者が互いを利用することで街の個性が育まれていったと見る。そして、都市空間が多様な人々を惹きつけ、活力を維持するには、渋谷のように、この対照的な二つの空間が互いに刺激し合い、均衡状態を保つ関係にあることが必須ではないかと考える。

だが、実際には渋谷の若者たちが自ら発見し、獲得した都市空間は、再開発の中に取り込まれ、施設化しつつある。駅の周りも、必要と思われる箇所に椅子すら置いていない場所が多く、すべてが消費を前提としているかに見える。現状、居心地のよいパブリックスペースを見つけるのは難しい。再開発が進むにつれ、市民の環境が商業活動の犠牲になっていると学生たちは感じる。

渋谷に限らず今日の大都市においては、国際的な都市競争に勝つためにも大規模なアップグレードが常に不可欠だと考えられている。だが、画一的な再開発を広げることで、果たして国際的なビジネスパーソンにとっても本当に都市の魅力が増しているのだろうか。渋谷の魅力は、路上にいる人々のふるまいや自主的な営みが新しい文化を生み、より多くの人々を巻き込んでいったプロセスから生まれたものだ。人々の自主性、自治、自然発生的に起こることといった、完全には管理しきれないものやことを許容する力、あるいは寛大さを、都市としてどう備えていくのか。そのことが問われていると彼らは考えるのである。

さて、こうして海外からやってくる学生たちは、日本に住む私たちが想像する以上に、日本の社会、日本の都市について奥深く理解しようとしていることが分かっていただけたと思う。彼らは、この国の建築家たちが到達した高みを謙虚に賞賛する一方で、国際社会に共通する、あるいはこれから彼らの国々も直面するかも知れない脱成長社会の状況を知り、自らの学びとしようとしている。私たちの方も、このインバウンドの現象から得られるものがあるのではないか。例えば、日本を観察する学生たちの目を借りて自国を見つめ直すといった機会をもっと広げることができれば、私たちも居心地のよい自己満足ゾーンから一歩踏み出し、岐路に立つ社会の未来を考える上で少なからぬ収穫を得られるのではないかと思うのである。

2　ハーバード大学デザイン大学院＋太田佳代子『SHIBUYA！ハーバード大学院生が10年後の渋谷を考える』（CCC メディアハウス、2019）